

# 「子どもの保健A」で学習する手指衛生の実践実態

— 保育学生を対象とした質問紙法による意識と行動調査 —

The practice actual situation of hand washing to learn in “Child health A”

— Consciousness and action investigation by the questionnaire method for childcare and child education students —

次世代教育学部こども発達学科

古田 康生

FURUTA, Yasuo

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：子どもの保健, 手洗い習慣, 保育学生

**Abstract:** The purpose of this study was to investigate the awareness and behavior of hand washing by questionnaire method for childcare student. The following results were obtained.

- 1) 96.97% of childcare student that was the subject of this study have a hand-washing habits on a daily basis.
- 2) There were many reasons as to why that active washing hands and “to clean” “to take the dirt”, the number of health reasons “to prevent food poisoning” was few. While few total number of responses was most frequent in the “Why do not wash your hands” is “troublesome.”
- 3) Wash your hands at the time, but was 90.92% after “defecation” is most often, “before cooking” and “before the meal” was less than 80% related to eating.
- 4) Type of soap used in the washing, the frequency of use of liquid soap, but was higher than all hand washing soap at the scene, was higher at a frequency of about the same also “hand washing only water.
- 5) Hand washing is the site, but responded palm, also of the finger, back of the hand is the subject of more than 80% and they wash, wash those who have wrist, and arms between the skin and nails were few.
- 6) In the time required for hand washing, and has resulted in a polite hand-washing can not be said about 70 percent of those surveyed this is equal to or less than 30 seconds.
- 7) The low frequency of use antiseptic alcohol rub, “that I used is not” “I do not know where to place” and was about 80 percent.
- 8) At the point where washing daily, was the answer the most common site “washing region”, some 64.85% also “None at all,” the result, which is concerned for students childcare who wish to caregivers to teach children was.

**Keywords :** child health, handwashing, childcare students

## I. はじめに

保育士・幼稚園教諭は、乳幼児の保育・養護と教育と携わる専門職である。その職務内容は、音楽や製作、

体育といった種々の活動以外にも多岐にわたり、一人の保育士あるいは幼稚園教諭（以下、保育者とする）が複数の乳幼児を対象に、「おむつ交換」や「排泄指導」、「哺乳」や「食事の援助」といった内容もある。

つまり、保育者が「同じ手」で排泄と摂食に関わる職務を日常的に実施していることとなる。これは、『オシメ交換等で保育者の手に付着してしまった排泄物に病原菌が含まれていた場合、そのケア直後の手洗いが「真の意味で清潔か否か」は重要な鍵となる。病原菌の付着したままの手で別の園児の哺乳や食事介助をすれば保育者の手が媒体となり集団感染さえも起こしかねない。』（原田ら、2010）といえる。

保育者が日常の職務の対象とする乳幼児は感染症に対する抵抗力が成人に比べて低い。加えて、乳幼児は「自分で自分の身を守ることができない」という特性があることから、保育者の手洗い意識とその実施実態は非常に重要と考えられる。

これまで「手洗い衛生」に関連する先行研究は、医療・看護師養成課程では掛合（2008）や升田（2010）、尾上ら（2010）、食品衛生分野の栄養士・製菓衛生士養成課程では佐藤（2010）や児玉（2010）と多くの報告がある。保育士養成課程に関する研究は極めて少ない（原田ら、2010）。

児玉（2010）は、栄養士養成課程1年次学生と2年次学生を対象に比較し、手洗い衛生教育前後の効果を検証し、次の研究結果を示した。つまり、①手洗い時間を実測したところ、石鹸洗い30秒とすすぎ20秒の目標値は、教育を受けた2年生は目標値をほぼ満たしていたが、1年生は、目標時間の半分程度の時間しか洗えていない、②洗い残しが多い部分は、指先、手のひらのしわ、親指であった、③手洗いのタイミングで、汚染度が高いと考えられる「トイレ後」の手洗いが不足している学生がいる、④石鹸やアルコール消毒剤の効果についての理解度が低い学生がいる、⑤手洗い教育後は手洗いの自己評価が高くなったが行動が伴っていない、これらの結果から、1年生には早期からの衛生教育と2年生には継続的な教育が必要であると報告している。

尾上ら（2011）は、看護師養成課程の学生を対象に手指衛生教育の効果を検証するため、培養法を用いて手洗いと擦式アルコール消毒手技の判定を試みている。培養法とは、手指表面に付着する生菌（増殖能を有する細菌）の棲息部位、菌数および種類が検出できる方法である。その結果、1年から4年と学年が進むにつれ合格判定者の割合は増加するものの、1年次から確実に手指消毒手技を体得させる必要があると指摘している。

保育士養成課程の必修科目である「子どもの保健A（総論）」で使用する教科書「新 保育士養成講座第7

巻 子どもの保健」では「手指衛生」に関して、①手洗いは園内感染予防の基本である、②手洗い設備は保育室内に設置するのが望ましい、③保育士が細菌の媒介者にならないよう手洗いの手指衛生の励行をしなければならない、と記載されている。また「通常の汚れは流水と石鹸で行うが、インフルエンザなどの感染症流行時は汚れを取った後、擦式アルコール手指消毒薬を用い、感染症予防を意識して、正しい手指消毒を指導する」とある。加えて、液体石鹸使用の推奨や洗浄後のタオルの使い方とその乾燥方法についても触れている。

「保育者は環境の一部である」という観点から手指衛生をとらえた記述では、「幼児期の基本的生活習慣としての清潔習慣を習得させるしつけは、大人の行動を模倣するところから開始する（佐藤洋子、2011、一部筆者が加筆）、つまり幼児は1歳半頃から大人の真似をして手洗いをしたがるようになる。よって、保育者が幼児のお手本となれるよう心がけ、子どもの発達に合わせて自発的に行えるよう環境を整えることが必要である。また、指導上の留意点として、①ビデオや絵本などの視聴覚教材を活用して指導する、②上手にできた場合は褒める、③爪切りは保育士がおこなう、④手洗い用の液体石鹸、薬用石鹸、ペーパータオル、等も活用する、⑤集団保育の場合は、本人専用の毎日洗濯された清潔なタオルを準備させる、⑥洗面台の蛇口が混合栓の場合、熱湯が出ないように注意する、と実際の保育における注意事項が明記されている（佐藤洋子、2011）。

保育士養成課程学生を対象とした「手指衛生」に関する研究では、2年制課程の学生を対象に手洗い教育前後の教育効果を研究した報告がある。それによると、①石鹸使用の有無では、教育後は、全ての手洗い場面（帰宅時、排便後、食事前、料理前）で「流水手洗い」を「石鹸手洗い」が上回った、②教育後、手洗いに要する時間では、「30秒以上」の者が増加した、③手洗い部位では、全ての部位（掌、指のまた、皮膚と爪の間、手の甲、手首）が教育前より増加していた、と教育の効果を報告している。

保育者は、感染症に対する抵抗力が弱いばかりでなく、自ら自分の身を防衛できない存在である幼児に対して素手で排泄や摂食の援助をしなければならない。よって、手指衛生教育は非常に重要である。しかしながら、前述のような責務を負う保育職を目指す保育学生を対象とした「手指衛生」に関する研究報告は、他保健衛生分野の養成課程学生（医療・保健・衛生領域

専攻)を対象とした報告に比べ極めて少ないのが現状である。

## II. 目的

本研究では、保育職を志望する保育・幼児教育専攻学生の「手洗いに関する意識と行動の実態」を質問紙調査により明らかにし、今後の保育士・幼稚園教諭養成課程の手指衛生教育に役立てる基礎的資料を得ることを目的とした。

## III. 方法

### 1. 調査対象

保育士および幼稚園教諭養成大学であるA大学に在籍し、保育・幼児教育を専攻する1年次学生(以下、保育学生とする)66人とした。なお、女子学生35人、男子学生31人であった。また、本研究の調査対象者は、「子どもの保健A(1年次前期開講・コア科目)」を履修し、規定の出席率(66.7%以上)を充たしている学生とした。

### 2. 質問紙調査方法

#### (1) 調査期間

平成24年7月の第2週の授業日(授業回数15の第13回目の授業)とした。

#### (2) 調査手順

全ての調査は、「子どもの保健A(総論)」の授業時間内に実施された。調査を開始するにあたり、本研究の手順と主旨が明記された質問紙を配布して、口頭と文書にて説明した。同意が得られた学生のみ、質問紙に回答を記入させ、その場にて回収した。回答時間は15分程度とした。

#### (3) 調査項目

先行研究(原田眞澄ら, 2001)を参考に次の9項目

を調査した。1)手洗い習慣の有無, 2)手を洗う理由, 3)手を洗わない理由, 4)手を洗うタイミング, 5)手を洗う洗剤の種類(固形石鹸または液体石鹸), 6)手洗いの部位, 7)手洗い時間(所要時間の長さ), 8)擦式アルコール消毒剤の使用頻度, 9)日常の手洗いで注意しているポイント

## 3. 倫理的配慮

本研究を始めるに当たり、研究主旨を説明するため、主旨と調査方法を質問紙に記載し、口頭で次の項目を説明した。①研究結果を公表するに当たり、個人が特定されることはない、②参加は途中であっても断ることができ、そのことが他に何ら影響しない、③質問紙は、研究者が研究期間を通して厳重に保管し、研究終了後は速やかに適切な方法で破棄する、の以上3点の承諾を得た上で、希望者のみ質問紙への記入を開始させた。

## IV. 結果

### 1. 手洗い習慣

日常の手洗い習慣を確認するため、4件法にて調査した結果、「必ず洗う」が27人(40.91%),「だいたい洗う」が37人(56.06%),「あまり洗わない」が2人(3.03%)であり、「洗わない」はいなかった。つまり、毎日の生活において手洗いでは「だいたい洗う」を含めると96.97%が手洗い習慣があるという結果が得られた。

### 2. 手を洗う理由

手を洗う理由(複数回答可)について《表1》の結果を得た。質問は、理由項目5つから複数回答させた。本調査では先行研究と比較検証するため原田ら(2001)の報告を参考に「手を洗う理由項目」を設定し、複数回答を可能とした。のべ178件の理由回答数が得られ、一人あたりの理由回答数平均値は $2.70 \pm 1.17$

表1 日常で手を洗う理由 (n=66)

順位	理由項目	本調査結果	先行研究結果 (原田ら2010)
1	清潔にしたいから	55 (83.33%)	89.50%
2	手の汚れを取りたいから	52 (78.79%)	50.70%
3	さっぱりするから	36 (54.55%)	78.90%
4	小さい頃からの習慣だから	23 (34.85%)	26.80%
5	食中毒を予防したいから	6 (9.09%)	23.90%
5	洗わないと人から注意されるから	6 (9.09%)	7.00%
		2.65/人	

件であった。つまり、2から3の理由により手洗いがされているといえる。「清潔にしたい」「汚れを取りたい」という能動的な理由が上位となり、専門職として求められる衛生面を意識した「食中毒予防」と他動的な「注意されるから」という理由は少数であった。

### 3. 手を洗わない理由

手を洗わない理由（複数回答可）の結果を《表2》に示した。質問は、「洗う理由」同様に、洗わない理由項目6つから複数回答を可能とした。32件の理由が回答され、一人あたりの理由回答数平均値は0.50±0.90件であった。「面倒くさい」が16件と最も多い回答であったが、「洗わない理由」回答総数少ない結果であった。

### 4. 手を洗うタイミング

手を洗うタイミング・場面（複数回答可）を調査したところ《表3》の結果を得た。「いつ手を洗うかというタイミング」は6つから複数回答させた。この質問項目は「洗う・洗わない理由」と同様に先行研究と比較検証するため原田ら（2001）の報告を参考に「いつ洗うか」の質問項目を設定し、複数回答を可能とした。のべ306件が回答され、洗うタイミング回答数平均値は4.64±1.36であった。つまり、本研究の対象者は日常的に6つの場面の内、4から5のタイミングで

手洗いを実施している。「排便後」が最も高値で90.92%であった。一方、「料理前」や「食事前」といった摂食に関わる機会であるにもかかわらず、いずれも80%を下回る結果となった。

### 5. 手を洗う洗剤の種類（固形石鹼または液体石鹼）

今回の調査では、全ての手洗い機会に「流水手洗いのみ」と「液体石鹼」が多く、固形石鹼の使用頻度が低いことが明らかとなった（《表4》）。

### 6. 手洗いの部位

調査対象者が「普段、洗っている」と自己申告した部位を「手洗いの部位」として《図1》に示した。

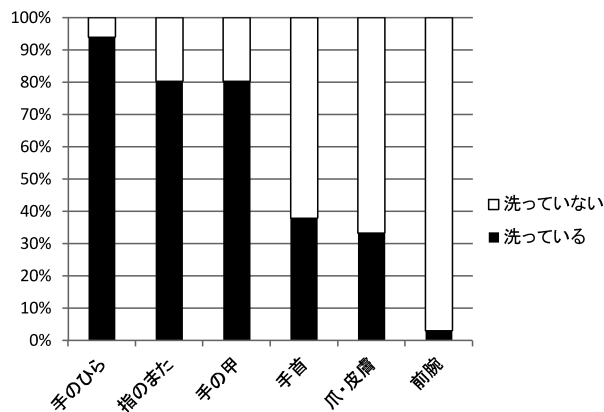


図1 手洗いで洗っている部位

表2 日常で手を洗わない理由 (n=66)

順位	理由項目	本調査結果	先行研究結果 (原田ら2010)
1	面倒くさい	16 (24.24%)	40.80%
2	近くに水道がないから	7 (10.61%)	36.60%
3	自分の手は汚れていないから	5 (7.58%)	45.10%
4	誰にもとがめられないから	2 (3.03%)	5.60%
5	食中毒にはならないから	1 (1.52%)	5.60%
5	抗菌グッズを使用しているから	1 (1.52%)	2.80%
7	洗っても感染症は防げない	1 (1.52%)	0%
		0.48/人	

表3 いつ手を洗うか（手を洗うタイミング）(n=66)

順位	タイミング項目	本調査結果	先行研究結果
1	排便後	60 (90.91%)	100.00%
2	帰宅直後	52 (78.79%)	42.30%
3	料理・調理前（自炊）	52 (78.79%)	97.20%
4	掃除後	51 (77.27%)	—
4	スポーツ・運動後	51 (77.79%)	—
6	食事前	40 (60.61%)	39.40%
		4.64/人	

表4 手洗いで使用する洗剤の種類 (n=66)

	洗うタイミング	流水のみ		固形石鹼		液体石鹼	
		人	%	人	%	人	%
1	排便後	38	57.58	5	7.58	20	30.30
2	帰宅直後	21	31.82	4	6.06	29	43.94
3	料理・調理前(自炊)	21	31.82	5	7.58	29	43.94
4	掃除後	19	28.79	7	10.61	28	42.42
5	スポーツ・運動後	28	42.42	2	3.03	24	36.36
6	食事前	19	28.79	7	10.61	14	21.21
		24.33	36.87	5.00	7.576	24.00	36.36

掌((手のひら) 95.4%), 指のまた(81.5%), 手の甲(81.5%)の3部位は高値を示したものの、爪と皮膚の間、手首、前腕はいずれも40%以下であり、洗浄すべき部位の5部位を満たしている者は11人(16.67%)であった。また、調査対象者が在籍するA大学が「子どもの保健A(総論)」の授業で指導する「6部位の全てを洗う」を満たしていたのは2人(3.03%)にすぎなかった。手洗い部位の平均値は3.35であった。

#### 7. 手洗い時間(所要時間の長さ)

手洗い時間の結果を《表5》に示した。10~30秒未満が最も多く27人(41.5%)であった。次いで、30秒~1分未満で19人(29.2%)であった。5~10秒未満は17人(26.2%)であった。大量調理衛生管理マニュアル(厚生労働省)に示されている「手洗いの目標時間」、つまり、石鹼洗い30秒とすすぎ洗い20秒を満たしているであろうと考えられる手洗いに1分間以上の時間をかける対象者は1人(1.54%)であった。

表5 手洗い時間の長さ (n=66)

手洗いの時間	人数	%
5秒以下	0	0.00
5~10秒	17	25.76
10~30秒	28	42.42
30~1分間	20	30.30
1分間以上	1	1.52
	66	100.00

表6 擦式アルコール消毒剤の使用状況 (n=66)

使用内容	人数	%
消毒剤が設置された場所を知らない	33	50.00
使ったことがない	21	31.82
食事前に使用する	6	9.09
トイレ後に使用する	5	7.58
あれば使う	1	1.52
	66	100.00

#### 8. 擦式アルコール消毒剤の使用頻度

擦式アルコール消毒剤の使用頻度の回答結果を《表6》に示した。「使ったことがない」または「有る場所を知らない」を合わせると52人となり78.79%が日常的に活用できていないという結果であった。使用機会が多かったのは、「食事前」が6人(9.09%),「トイレ後」が5人(7.58%)であった。食事前とトイレ後の両方とも使用している者はなく、今回の調査対象者では、擦式アルコール消毒剤の効果が十分に理解されておらず、適切に活用されていないことが明らかとなった。

#### 9. 手洗いの注意ポイント

「普段の手洗いで気を付けているポイント・注意点」の回答では、「全くない」が23人(34.85%)であった。一方、何らかの注意をして手を洗っているのは43人で65.52%であった。手洗い注意点を複数回答可としてまとめたのが《表7》である。最も多い回答があったのは、「洗う部位」で22人(33.33%)であった。

表7 手洗いで注意するポイント（複数回答可 n=66）

手洗い注意ポイント	人数	%
全くなし	23	34.85
洗う部位	22	33.33
石鹸を泡立てる	16	24.24
すすぎ洗い	16	24.24
洗う洗面台が清潔かどうか	4	6.06
洗い後の乾燥方法	2	3.03
洗う時間の長さ	2	3.03
石鹸の種類	1	1.52
	86	

## V. 考察

本研究では、四年制大学保育士・幼稚園教諭養成課程の1年次学生を対象に「手洗い意識・行動」を質問紙調査により明らかにすることを目的に実施し、その結果を保育士・幼稚園教諭養成課程での「手指衛生教育」に役立てるため基礎的資料を得ようと試みた。

### 1. 手洗い習慣

調査対象となった保育学生の日常における手洗い習慣は、96.97%が「必ず洗う」と「だいたい洗う」と回答していた。先行研究では、必要に応じて毎日洗うのが前提となっているため、手洗い習慣の有無を報告した結果は見当たらなかったため比較はできなかった。保育職の職務内容を考慮すると手洗い習慣は必要に応じて自発的にできなければならないと考えられ、全ての調査対象者（保育学生）が「必ず洗う」が選択されるように教育する必要があると考えられる。

### 2. 手を洗う理由

手を洗う理由（複数回答可）については、先行研究とほぼ同様な傾向を示した。つまり、主観的な目的が高値を示し、習慣的、衛生面からの手洗い目的は低値であった。「他者から注意を受けるから洗う」は、保育者として幼児を指導する点を考慮すると不十分な理由であり衛生教育をする上で一考が必要である。

### 3. 手を洗わない理由

手を洗わない理由（複数回答可）の回答数は、先行研究に比べると低い傾向を示した。しかし、後述する「手洗いの現状」によると実際には手洗いができていないにもかかわらず、理由が回答できていないと推察され、手洗い行動と意識にズレが生じている現状が明らかとなった。

### 4. 手を洗うタイミング

手を洗うタイミング（複数回答可）では、排便後が最も高値で、食事前が最も低値であった。排便後は、手指の汚染率が最も高く、必ず石鹸を使用した手洗いが必要な場面である（衛生マニュアル）が、今回の調査では90.91%であった。保育者の職務では「子どもの排泄物の処理」や「トイレ指導」の機会が少なくない。よって、作業後の手指表面には可視できる汚れ以外にも肉眼では見えない病原菌が付着している場合も考えられる。これらの事実を「子どもの保健」授業の中で効果的に教育するために「培養法」等を用いて体験的に理解できる教授方法を開発する必要がある。

また、手洗い率60.61%にとどまった「食事前」も同様に、可視できる汚れであれば「洗い」が実施されるが、そうでない場合は手を洗っていないと推測できる結果であった。

以上のように、これらの「手洗いの現状」を考慮すると「洗わない理由」回答数は現状を反映していないと言え、意識に行動が伴っていない現状が明らかとなった。

### 5. 手を洗う洗剤の種類（固形石鹸または液体石鹸）

保育の現場では液体石鹸が推奨されているが（佐藤洋子, 2011）、今回の調査でも液体石鹸の使用率が固形石鹸よりも高い結果となった。しかし、石鹸を使用しない「流水のみ」の回答数も高値であった。目に見えない病原菌を洗い流すには石鹸の使用が不可欠である。この点からも手指衛生教育の理解を深め、行動力を高めるためにも培養法を用いて「石鹸使用手洗い」と「流水手洗いのみ」後の細菌数比較等の体験的な教育が必要である。

### 6. 手洗いの部位

手洗い部位は、手のひら（掌）、手の甲、指のまた

(間)が80%を超えて洗えていると自己申告していた。しかし、皮膚と爪の間や手首、に関しては30%程度と低値を示し、前腕ではほとんどの対象者が洗っていないと明らかとなった。小櫃(2011)による「手洗い方法」では、①流水で汚れを落とし、石鹸を付けて手のひらをこすり合わせる、②手の甲を洗う、③指先を洗う、④指の間を洗う、⑤親指と手の甲をねじり洗う、⑥手首を洗う、⑦流水で石鹸を洗い流す、⑧自分のタオルやハンカチ、ペーパータオルで水分を拭き取る、と示している。本調査では、手首は38.50%と十分な結果とは言えない。前腕部は洗浄部位として示されていないが、作業において前腕部に細菌が付着しないとは考えられないため、手首洗浄だけでなく、前腕部の洗いが必要と考えられる。本調査は自己申告であり、看護学生や栄養学生を対象とした先行研究のように実際に手洗いをさせ直接観察して手洗い部位と洗浄度を判定する方法を用いていない。そのため、洗浄度合いは不明である。児玉(2011)や柘田(2011)は直接観察やビデオ撮影による間接観察により「手のひらのしわ」や「親指部」、「指先」の洗い残しがあると指摘していることから、「洗っているか否か」では限界があり、今後は直接観察による判定法を導入する必要があると考えられた。

## 7. 手洗い時間(所要時間の長さ)

手指衛生教育を受けた栄養専攻学生は、石鹸洗い平均値が $25.8 \pm 11.0$ 秒、すすぎ洗い平均値が $16.3 \pm 5.4$ 秒という報告(児玉, 2011)があるが、本調査では「手を洗う時間の長さ」を調査対象者の本人が認識する洗い開始から、すすぎ終わるまでのおおよその時間とした。野原(2011)は、「日本では15秒、アメリカ疾病予防センターでは15~20秒以上を推奨しているが、保育士としての指導的立場を考えると、しっかり丁寧に洗うことが望まれる」と述べるにとどめている。一方、大量調理に携わる栄養士の指針となる「大量調理施設衛生管理マニュアル」では、石鹸洗い30秒程度とすすぎ洗い20秒程度と明確に示されている。保育者の職務内容に大量調理は含まれていないが、幼児の衛生管理を考慮すると同等に丁寧な手洗いが求められる。本調査では68.12%が30秒以下の手洗い時間であり必ずしも丁寧に洗っているとは考えられない。手指衛生教育では、洗う部位や方法に合わせて時間の目安を示す必要があると考えられる。

## 8. 擦式アルコール消毒剤の使用頻度

擦式アルコール消毒剤の使用頻度は、81.82%が「設置された場所を知らない」あるいは「使ったことがない」と回答しており、十分に活用されていないことが明らかとなった。2009年の新型インフルエンザの流行を機に擦式アルコール消毒剤の使用頻度が高まったが、今回の調査では使用頻度は低値であった。横山(2011)は、保育者は子どもに「インフルエンザなどの感染症の流行時は汚れを取った後、擦式アルコール消毒薬を用い、感染予防を意識した正しい手指消毒を行うよう指導する」と記載している。本調査では、子どもに擦式アルコール消毒剤の効果や使い方を指導すべき保育学生自身がそれを適切に活用できていないことが明らかとなった。先行研究と比較してもその使用頻度は著しく低く、早急な対応が必要な課題と位置付けられた。

## 9. 手洗いの注意ポイント

「普段の手洗いで気を付けているポイント・注意点」ではのべ63項目が回答された。「洗う部位」が最多であった。本調査では、注意あるいは意識して手を洗う傾向は得られたが、調査対象者が注意・意識して行う手洗いが適切か否かの判断はできない。保育者として乳幼児に適切な手洗いを指導できる保育者を目指す保育学生が、注意点が「全くなし」34.85%と高値を示したことは根本的に「手指衛生教育カリキュラム」を見直す必要がある結果と考えなければならない。

## VI. 今後の課題

本研究は、保育学生の「手洗いの意識と実践実態」に関する質問紙調査であり、手洗い等の実測的研究ではない。そのため、手洗いの実践では調査対象者の自己申告が基準となり、手洗いの所要時間や洗い残しは判定できなかった。保育者の職務内容を考慮すると保育学生への「手指衛生教育」の重要性は高く、不可欠である。よって、本調査の結果を鑑みると今後は①手洗い時間の実測、②培養法による手洗い洗浄度と洗い残しの判定、といった実測的研究が必要となる。また、「手指衛生教育」による教育効果の検証や継続性についても検証する必要がある。加えて、培養法等を用いた「手指衛生教育プログラムの開発」とその効果検証が必要と考えられる。

## Ⅶ. まとめ

- 1 本調査の対象となった保育学生の96.97%が日常的な手洗い習慣を有していた。
- 2 手を洗う理由として「清潔にしたい」や「汚れを取りたい」という能動的な理由が多かったが、「食中毒を予防したい」という衛生的な回答数は少数であった。「手を洗わない理由」で「面倒くさい」が最も多かったが回答総数は少数であった。
- 3 手を洗うタイミングでは、「排便後」が最も多く90.92%であったが、摂食に関わる「食事前」と「料理前」は80%を下回った。
- 4 手洗いで使用する石鹸の種類は、全ての手洗い場面で固形石鹸よりも液体石鹸の使用頻度が高値を示したが、「流水のみの手洗い」も同程度の頻度で高値を示した。
- 5 手洗い部位は、手のひら、指のまた、手の甲は80%以上の対象者が洗っていると回答したが、皮膚と爪の間と手首、腕を洗っている者は少数であった。
- 6 手洗いの所要時間では、本調査対象者の約70%が30秒以下であり丁寧な手洗いができているとは言い難い結果となった。
- 7 擦アルコール消毒剤利用頻度は低く、「使ったことがない」や「設置場所を知らない」が約80%であった。
- 8 日常の手洗いを実施する上で注意するポイントでは、「洗い部位」が最も多い回答であったが、「全くなし」も64.85%あり、子どもを指導する保育者を志望する保育学生にとって危惧される結果であった。

## 引用文献

- 原田眞澄, 岡田淳子 (2001) 保育学生の手洗い指導の評価, 中国短期大学紀要, 32, pp. 149-158
- 掛合益子 (2008), 手指衛生教育後の看護学生の手洗いおよび擦式手指消毒実施状況, 吉備国際大学保健科学部紀要, 13, pp. 35-41
- 児玉ひろみ (2011), 栄養士養成課程学生の手洗いの実施状況と意義, 淑徳短期大学研究紀要, 50, pp. 187-201
- 厚生労働省 (2012), 大量調理施設衛生管理マニュアル, pp. 11
- 升田由美子 (2010) 学生の手洗い動作と手洗い結果の検証－効果的な手洗い教育に向けて－, 旭川医科大学研究フォーラム, 11, pp. 78-79

- 野原八千代編著 (2012), 子どもの保健演習セミナー, 建帛社, pp. 99-100
- 野原八千代編著 (2012), 子どもの保健演習セミナー, 建帛社, pp. 128-129
- 尾上孝利, 佐々木彩夏, 藪下恵里, 足立裕亮 (2012), 看護学生手洗いおよび擦式手指消毒実施状況の評価, 太成学院大学紀要, 14, pp. 43-52
- 佐藤幸子 (2008) 製菓学科学生の手洗い習慣と一般細菌ふきとり検査値からみた手洗い効果, 目白大学短期大学部研究紀要, 45, pp. 111-122
- 新保育士養成講座編集委員会編著 (2011), 第7巻子どもの保健, 全国社会福祉協議会, pp. 170-177
- 高内正子編著 (2011), 子どもの保健演習ガイド, 建帛社, pp. 102-103